　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2019.08.24（土）

**川崎支部便り（定期便）（2019年9月　第19号）**

**（オープンで各自が主役：川崎支部）**川崎支部支部長　山岸　一雄

（執筆者　山岸）

　川崎支部の皆さん、お元気でしょうか。

　先月の川崎支部便りはお楽しみ頂けたでしょうか。

先日、落語家で人間国宝でもある柳家小三治師匠の弟子、柳家一琴師匠の落語と講演会を聞きました。面白い内容でしたので、内容をかいつまんで説明します。

①落語家の三大原則は「酒・女・博打」。②落語家は古典芸能を人に教える商売である。③柳家小三治師匠に入門する時に言われた事は、標準準語を覚えること（一琴は大阪出身）、東京弁を覚えること、江戸弁を覚えること、鼻濁音は鼻から抜くこと。破裂音をそのまま発音すると、会話が汚く聞こえる。④入門時は身長160ｃｍ、体重100kgだったので、見た目に痩せて見える様にすること。入門後は、リバウンドで体重が110kgになった。⑤師匠は小話（隣の垣根と塀等）を覚えないと、落語を教えてくれない。この小話を覚えることを怠ると、落語の一席で大きなしくじりをする。⑥古典芸能程、今の時代を取り入れないと残らない。今を知らないと、古典が語れない。⑦落語家は持ち時間が重要。⑧落語の一席は15分程度だが、聴衆や雰囲気を見て、ストーリーの順番を入れ替え、場を盛り上げる。落語は起承転結が大事なので、毎日の稽古を続けることで、話の内容が見えてくる。⑨落語は初めて話す様に、話すことが重要。ミュージカルでも初日はうまく出来るが、2回目はミスが出やすい。初日は緊張をしているからである。だから、毎日が初日の気持ちで高座を務めることが重要。⑩毎日のけいこの積み重ねは、裏切らない。⑪人間が最初に感じるのは嫉妬である。例えば、兄弟が生まれ、親の愛情が移っていると感じる時等がある。嫉妬してはいけない。落語家は家柄が大事で、たとえ自分よりもヘタでギャラが10倍以上貰っている落語家がいても、嫉妬してはいけない。（現在の林家三平を指している）⑫相手の落語家が自分よりもヘタと思う時は、相手は自分と同程度、うまいと思う時は自分よりはかなり上手、かなり上手と思う時は相当に上手である。⑬小さなごまかしは徐々に膨らみ、収拾がつかない位に大きくなる。⑭油断をしないで、毎日新しい気持ちで生きることが重要である。（ポイント）

**川　崎　点　描　（せたがやゆかりの人－石川達三）③**

石川達三（明治38年（1905年）～昭和60年（1985年））は、昭和15年（1940年）から昭和38年（1963年）まで世田谷区の奥沢に住んだ秋田県出身の小説家です。人口増加に伴い、八幡小学校と尾山台小学校から分離した九品仏小学校が昭和27年（1952年）に誕生すると、その初代PTA会長になりました。「自分の子供たちを、あまり都会的な小生意気な人間にしてしまいたくない。また、あまり泥臭い田舎のものにしてしまいたくない。さういう点、九品仏は東京でありながら適当に田舎だ」と言っていました。また、「蒼茫（そうぼう）」（註1）で第一回芥川賞を受賞しました。

　石川達三が世田谷区奥沢町（今の奥沢）に越してきたのは、日本とアメリカとの戦争が始まる前年、昭和15年（1940年）で、その三年程前に結婚した達三は、この時34歳で二人の娘の父親でした。これより前、昭和10年（1935年）、小説「蒼茫」で第一回芥川賞を受賞してから、石川達三のぱっとしない生活は終わりました。

　当時の芥川賞は、たいして世間の注目を集めませんでした。しかし、この時最終予選に残った新進作家に、後に活躍する太宰治、高見順、外村繁がいたことからわかる様に、この賞はやはり権威のある賞でした。

　だが、石川達三はまさか自分がこんな賞を貰えるとは思っていなかった様です。達三にしても、作家として、いささかの自負は有りましたが、この様な幸運が巡ってくるとも思っていなかった様です。この時まで、達三の人生には数多の失敗が多く、府立一中（後の日比谷高校）や岡山の旧制六高を目指しましたが、いずれも試験に落ちて入れませんでした。小説を書く様になったのはその頃からです。結局、私立の早稲田大学へ進みますが、学費が続かないで退学し、電機業界誌の編集者となりました。社会人になり、実業界の空気にふれた達三は、小説を書く意欲を喪失し、人生の転機を求めてブラジル移民の群に加わり、サンパウロ奥地の日本人農園で働きました。しかし、それも長続きしないで、半年で帰国しました。

　ブラジルで石川達三が見たのは、希望に燃えた開拓者ではなく、国を追われる様にして流されていく貧しい人々でした。なんとしてもこの現実を書かなくてはならないと思いたち、今までの自分の小説は「文学ごっこ」に過ぎなかったと痛感しました。これが転機となり、出国を控えたブラジル移民が集められた神戸の移民収容所を舞台とした小説「蒼茫」を作り上げ、それが芥川賞に輝きました。

　これを機に、猛然と小説を書き始め、雑誌の特派員として、日中戦争のさなか中国へ渡ると、「生きてゐる兵隊」を書き、戦争の陰鬱な実状をしつこく書いたので、当局の怒りを買い新聞紙法問われ発禁処分となり、禁固4ヶ月執行猶予3年の判決を受けました。達三は法廷で、「もっと本当の人間を見、その上に真の信頼を打ち立てなければ駄目だ」と、昂然と言い切っています。当時としては非常に勇気を要する発言であり、真実を見極めようとする目、ヒューマンな正義感は以後の作家の姿勢にも一貫しています。その作風も『蒼氓』以来ほぼ一貫し、社会性の強いテーマをルポルタージュ手法で描き出すのに特徴があります。

戦前の日本には言論活動を取り締まる厳しい法律や規則が有り、石川達三は裁判にかけられても創作意欲はそがれませんでした。戦争や社会問題以外にも書くことありすぎて、筆が追いつかない程で、午前中と午後と夜と三種類の作品を平行して書いていたのです。

　家は九品仏駅のそばで、廻りは麦畑、踏切の向こうの玉川聖学院付近は一帯が田圃で、夏には蛙の声がやかましかった様です。近くに有った池ではザリガニが取れ、越してきてから長男が誕生しました。「九品仏は東京でありながら適当に田舎だ。田舎だけれども東京の文化的なものはすべて備わっている。子供を育てる環境としては一番いい所ではないかと思う。」と達三は書いています。

　越してきて間もなく、太平洋戦争が始まるとすぐに東京はB29の爆撃にさらされました。その戦火を避けて都心から人々が移転してきました。達三は隣組に駆り出され、東の空が焼夷弾に赤く染まるのを見ながら、近所の消火槽の点検に飛び回り、高射砲から打ち出された砲弾の破片が落ちてきて達三の耳元をかすめたことも有った様です。空襲の炎は自由が丘迄嘗め尽くしましたが、達三の家はかろうじて焼けずに済みました。

　戦中から戦後のかけては、都会人も野菜を育てて食料不足を凌ごうとし、達三も庭に5坪の畑を作りましたが、敷地を買いましたが、茅（かや）や薄（すすき）が自生していた荒れ地だったので、すぐに雑草がはびこりました。結局、雑草との戦いに明け暮れ、めぼしい収穫は得られませんでした。

　達三は犬が嫌いで、飼い主にへつらう事しか知らぬ嫌な動物と考え、家族の面倒を見るだけでも大変なのに、犬の世話はごめんだと言っていました。

　達三の父は英語教師で、良く職場が変わったので、秋田、岡山、東京と各地を転々とし、達三は大きくなり単身上京してからも、都内を12、3箇所も移動をしたのです。地球の裏側のブラジルにも行きましたが、いったん奥沢に落ち着くと、昭和38年（1963年）に田園調布へ引っ越す迄、ここに留まって子供達の成長を見守りました。

　達三は長男を何々付属校と言った学校に入学させることが出来ましたが、あえて普通の学校に進ませました。じきに、近所の子供たちが遊びに来て、庭の柿の実をもいだり、蝉を取ったりする様になり、九品仏小学校のPTA会長も務めました。そこで、教育現場の実情に触れ、それが「人間の壁」を書く一つのきっかけになりました。

　達三は毎晩杯を片手に家族との団欒に加わり、戦前から始めたゴルフはかなりの腕前でした。戦後は油絵にも手を染め、幾度も展覧会を開きました。文壇のまとめ役として、日本文芸家協会理事長、日本ペンクラブ会長等を務め、晩年は芸術院会員になり、一時は政治家を志し、戦後初の衆議院選挙に立候補しましたが落選し、結局作家に専念しました。

　小説において奥沢時代の収穫は大きく、戦時下の言論弾圧に取材した「風にそよぐ葦」、教師のあり方を問う「人間の壁」、初老のサラリーマンと若者達のかかわりを描いた「四十八歳の抵抗」等の新聞連載小説は、いずれも奥沢の家で書かれたものです。

　次に越した大田区田園調布も、奥沢の隣町で、世田谷区、大田区、目黒区が境を接し、多摩川に出られる一体で、達三は後半生45年を送ったことになります。半世紀もたてば世の中は大きく変わり、多くのブラジル移民の様に、貧しさ故国を捨てる人は殆どいなくなりました。逆に繁栄の日本を目指して外国から「蒼茫」達が流れ込む様になりました。あたりの風景も一変し、もう蛙の大合唱は聞こえません。今は田園が住宅街に替わり、自由が丘にはしゃれた店舗が立ち並び、屈託なく闊歩する若者で賑わっています。

　石川達三は2005年のNHKTV番組「あの人に会いたい」で、「広い社会機構にぶつかって掘り下げ、現実をつかみ出す作品を書きたい」との言葉を残しています。人柄が判ります。昭和のさまざまな世相を描いた石川達三は昭和60年（1985年）1月、79歳の生涯を閉じました。

（註１）「蒼茫」とは、戦前の貧しい農民たちが夢を抱いてブラジルに渡り、厳しい現実に打ちのめされながらも、その地に根をおろそうと決意するまでを詳細に描いた作品で、第1部「蒼氓」、第2部「南海航路」、第3部「声無き民」の3部構成になった。「氓」は流浪する民を意味する。

　（出典：世田谷区上野毛4丁目　長瀬淑子氏　写真はYahoo Japanから引用）

　　　　　　　　

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（ゴルフに興じる石川達三）

**川崎支部の活動**

川崎支部の秋季～冬季にかけての行事予定は下記となりますので、是非参加願います。

・（済）2019.07.28（土）　第2回定期講演会（詐欺被害の実例）（夢キャンパスで14時から）

・2019.09.12（木）　湘南支部との情報交換会

・2019.09.28（土）　ミステリーツアー

・2019.10.05（土）　関東甲信越地区支部総会（ｉｎ　新潟）

・2019.10.19（土）　創立90周年記念行事（全体行事）

・2019.10.26（土）　神奈川三支部総会・合同懇親会（横浜キャンパス）

・2019.11.23（土）　第3回定期講演会（都市工学　長岡裕教授）（夢キャンパスで14時

　　　　から）

・2019.12.21（土）　第4回定期講演会（医用工学科　和多田雅哉教授）（夢キャンパスで14時から）

・2020.02.08（土）　第5回定期講演会（アップコン　松藤展和社長）（働き方改革で

数々の賞を受賞－高津区の誇り）（夢キャンパスで14時から）

**耳寄り情報**

トヨタは2009年から2013年迄、税金を払っていないことで有名です。巧妙なからくりとは？最大の理由は、「外国子会社からの受取配当の益金不算入」という制度が有るからです。外国の子会社から配当を受け取った場合、その95％は課税対象から除外されます。例えば、ある企業が外国子会社から1,000億円の配当を受けたとします。この企業は、この1,000億円の配当収入のうち、950億円を課税収入から除外出来るのです。つまり950億円の収入については無税となります。

何故この様な制度が有るのでしょうか。現地国と日本で二重に課税されることを防止するという建前です。外国子会社からの配当は、現地で税金が源泉徴収されているケースが多いのです。もともと現地で税金を払っている収入なので、日本では税金を払わなくても良いという理屈です。現地国で払う税金（例えば30％）と日本で払う税金が同額ならばその理屈も良いでしょう。しかし、配当金の税金は世界的に見て、法人税よりも安いのです。

つまり、現地で払う税金は、日本で払うべき税金はよりもかなり少なくて済むのです。例えば、1,000億円の配当が有った場合、現地での源泉徴収額は約100億円ですが、日本で1,000億円の収入が有った場合、本来は300億円の税金を払わなくてはなりません。現地で100億円の税金を払っているとの理由で、日本で支払うべき約300億円の税金を免除しているのです。配当に対する税金は、世界的に約10％前後ですが、途上国やタックスヘイブンと呼ばれる地域では、ゼロに近い場所も多いのです。

アメリカの子会社が日本の本社に配当した場合、源泉徴収額は10％ですが、日本の法人税は国税＋地方税で約30％です。日本で支払うべき300億円からアメリカで支払った100億円を差し引き、残りの200億円を日本で支払うべきでしょう。ここが税制の「抜け穴」です。

我々の生活に大きな影響を与えているのは消費税です。この消費税の創設に、実はトヨタが大きく関わっていました。そもそも消費税の導入は、財界の強い要望で実現しました。消費税の導入時に、大きな税金が一つ廃止されています。それは「物品税」です。物品税は、簡単に言うと宝石、ブランド品、自動車等に課せられる「贅沢税」でした。この物品税は戦後すぐに導入され、国民生活に根付いていました。物品税が有った当時は、国民の消費はおおむね上向きなので、贅沢品に対する課税は、必然的に高額所得者が負担していました。この物品税は税の徴収方法もきちんと管理され、徴税効果が高かったのです。

消費税は該当事業者が膨大で、集計計算も複雑なので、徴税効果が悪いのです。簡単に言えば、消費者が払った消費税がそのまま国庫に納入されないで、事業者のところで漏れることが有るのです。それに比べ、物品税は該当事業者が少なく、徴税経路も単純なので、徴税効率はほぼ100％に近かったのです。消費税に比べれば、格段に効率的な税金でした。

何故、物品税を廃止して消費税を導入したのでしょう。それは物品税に該当する業種の団体が、執拗に政治家に働きかけたからです。物品税を廃止すれば、自分たちの売り上げは確実に儲かります。その業界団体の先鋒にトヨタがいたのです。自動車にかかっていた物品税の税率は、3ナンバー車が23％、5ナンバー車は18.5％、軽自動車は15.5％でした。物品税が廃止されることで、導入時の消費税3％として、トヨタの乗用車は約15％から20％も安くなりました。その後、消費税が3％から5％に引き上げられたのは1997年です。その直後に法人税と所得税も引き下げられました。その法人税の減税の対象となったのは大企業で、所得税の減税の対象となったのは高額所得者でした。消費税による増収は約10兆円ですが、この約10兆円は大企業と高額所得者への減税分で全て無くなりました。

消費税はトヨタの物品税負担をなくしただけではなく、逆に利益をもたらしました。つまり、トヨタは消費税で儲けを得ていました。消費税の仕組みの一つに「戻し税」が有ります。消費税は「国内で消費されるものだけにかかる」という建前が有ります。だから、輸出されるものには、消費税はかかりません。ところが、輸入されるものは、国内で製造する段階で、材料費等で消費税を支払っています。その為、「輸出する時に、支払った消費税を還付する」のです。それが「戻し税」です。事実上の「輸出企業への補助金」です。というのも大手の輸出企業は、製造段階できちんと消費税を払っていない企業もあるそうです。2007年から2011年迄にトヨタが受け取っていた消費税の戻し税の額は、なんと約2,000億円にもなるのです。

皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。（連絡先：[k\_yamagishi@6kou.co.jp](mailto:k_yamagishi@6kou.co.jp) 山岸宛（窓口））